

奈

良県吉野地域では、1500年頃（室町時代）に造林が行われた記録があり、長年にわたり優れた林業技術が伝承され、発展してきました。

吉野林業の歴史や特徴を現代に留める景観、技術、文物などは、日本を代表する林業遺産となっています。

吉野林業という名称は、広義には吉野郡全体を指しますが、狭義には吉野川を木材搬出に利用してきた川上村、東吉野村、黒滝村を指しており、この狭義の地域の範囲が林業遺産として選定されました。3村を合わせた面積は44,861ha、そのうち森林が約95%を占めています。吉野地域は、峻峰が列をなしてそびえる大峰山脈や台高山脈を背にして、土壌は保水と透水性に優れ、年間降水量が多く、温暖な自然環境は、林木の生育に最適です。全域にわたって林齢に応じた多様な森林景観があり、地域固有の自然と歴史を物語る景観を形成しています。

特に、江戸時代に植林された「下多古の森」には、樹齢四百年を越えるスギやヒノキの巨木がそびえ立ち、その独特の景観は神秘的で、畏敬の念を抱かせます。水源林でもあるこの森は川上村によって買い上げられ、近世の林業技術を現在に伝える「歴史の証人」として、また、文化財建造物の修理に必要な資材のモデル供給林及び研修林である「ふるさと文化財の森」（文化庁設定）として、森林文



歴史の証人—下多古の森



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第4回

吉野林業

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員 深町加津枝

化にも配慮した取組が行われています。

吉野地域では元禄年間（1688～1704年）頃には「借地林制度」や「山守制度」が始まり、土地の所有権と使用収益権を分離する独自のシステムが構築されました。村内の森林所有者が村外の資本家に山林を貸す「借地林制度」は、現在ほとんど残っていませんが、村外の森林所有者が山守に管理を委託する「山守制度」は、今日も受け継がれています。山守は、村外の森林所有者が信用できる技術者として選んだ山林所在地の住民であり、植栽から間伐等の手入れ、資材の調達や労務者の指揮管理など、森林の育成から伐採、搬出までを手がけます。

吉野林業の特徴は、地域産の実生苗による密植と弱度の間伐を数多く繰り返し、大径材を生産する施業です。間伐は山守などの林業技術者の腕の見せ所であり、10年生、50年生、100年生と樹齢に応じて密度を調整し、手入れを継続していきます。

こうして育てられた吉野のスギ、ヒノキは、「通直」「完満」「無節」で目の詰まった材となります。また、スギは伐採後、葉がついたまま森で乾燥させる「渋抜き」を行うことにより、暖かみのある鮮紅色に仕上がり、市場で高く評価されています。特に、酒樽や桶などの材料である樽丸の生産では、年輪幅が狭く（1cmに8年輪以上）、均一なことが尊重され、吉野杉を用いた製品は品質の高さで知られています。こうした吉野林業の高い技術を裏付ける古文書や近代資料類、山仕事

で使用されてきた数多くの道具は、地元の資料館などで保存・展示され、文化の伝承や社会教育などに貢献しています。木材生産から運搬、製材にわたる一連の高い技術は今日まで引き継がれ、文化財や京都迎賓館など日本を代表する建造物から日常で用いる木工品にいたる、多様な木の文化を支えてきました。

吉野地域での林業技術の継承のため、機械化や人づくりにも取り組む永田晶三さんは、「種を採って植えるところから最後の利用の仕方までが吉野林業だ。ブランドを築き上げた先人はすごい。数百年先の価値ある森林のため、今、できることを全力で取り組みたい。」と言います。そして、川上村森林組合代表の南本泰男さんは、「これからは、システム化した新しい流れをいかにつくるかでしょう。最近設立した『吉野かわかみ社中』では、まさに持続可能な吉野材の一貫供給体制の確立と吉野ブランドの情報発信拠点となることを目指しています。」と力強く語ります。500年にわたる林業の歴史と先人たちの思いを引き継ぎ吉野

林業の新たな挑戦が始まっています。



吉野林業全書
(奈良県森林技術センター 所蔵)



木材市場の吉野材（吉野銘木製造販売（株）提供）



修羅出し（川上村地域振興課 提供）



吉野杉を使った
手作り風呂桶



川上村林材会館



吉野地域での最近の間伐作業



吉野材の無垢一枚板